

第7回

20世紀はじめの世界

監修・講師 松沢裕作

学習のねらい

帝国主義国間の戦争と植民地支配は、人びとの暮らしにどのような影響を与えたのだろうか。また、帝国主義国間の国際関係の特質とはどのようなものだったのだろうか。日露戦争と朝鮮半島の植民地化を例として学びながら、次の時代につながる帝国主義国家間の対立の激化、アジア諸国家での変革の動きの背景を理解したい。

keyword

● 植民地支配と植民地の近代

鉄道／鉱山／総督府／参政権

● 国民統合と帝国主義批判

日比谷焼き打ち事件／血の日曜日事件／社会主義

● 帝国主義諸国とアジア諸国の新しい動向

青年トルコ革命／イラン立憲革命／辛亥革命

植民地支配と植民地の近代

帝国主義国による植民地支配は、特別な統治機関を設置して行われた。イギリス領インドであれば、その頂点にはイギリス人であるインド総督が立ち、高級官僚もほとんどがイギリス人で占められた。日清・日露戦争を経て、植民地を支配するようになった日本も、先行する帝国主義国の統治方法を模倣し、台湾総督府、朝鮮総督府をそれぞれ設置した。

植民地では鉄道網の整備、鉱山開発、教育機関の整備などが、統治機関主導で進められた。こうした政策は、植民地の社会を大きく変えた。しかし、これらの近代化政策は、植民地宗主国の利益に沿った形で進められた。例えば鉄道は、宗主国が工業原料を植民地から運び出したり、その反対に商品を植民地に輸出したりするために建設された。また、植民地の住民の参政権は極めて限定されたものだった。植民地朝鮮でも、日本の帝国議会に議員を送り出すことはできず、また日本本土の法律も一部しか適用されなかった。

国民統合と帝国主義批判

植民地獲得競争の激化は、植民地に住む人びとだけでなく、帝国主義国の人びとにも影響を与えた。それぞれの国内では、国民が一体となって自国政府の対外政策を支持させるような国民統合政策が推進された。現在の社会福祉政策につながる社会保険制度がドイツではじまっ

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

たように、国民の生活を安定させることも、その手段の一つであった。しかし、こうした国民統合の進展は同時に、他民族を差別視する人種主義をも生み出した。

こうした国民統合の必要性は、帝国主義国間の競争がそれだけ国民に大きな負担を強いたことの裏返しでもある。日露戦争では、日露両国ともに国民へのしわ寄せが大きく、日本では、それが講和条約への不満というナショナリズムと結びついて日比谷焼き打ち事件が起き、ロシアでは、皇帝に生活の窮状を訴えるものの弾圧されるという血の日曜日事件が起きた。一方、ナショナリズムとは別に、国際的連帯を説く社会主義の立場からの帝国主義批判もあらわれた。

帝国主義諸国とアジア諸国の新しい動向

帝国主義国どうしは、それぞれの利害の変化に応じて対立と同盟・協商を繰り返した。日露戦争後に、交戦国だった日露両国が、それぞれの勢力範囲を確定する日露協約を結んだのはその一例である。しかし、こうした同盟・協商を繰り返すうちに、20世紀初頭には、英・露・仏の三国協商と、ドイツ・オーストリア＝ハンガリー・イタリアの三国同盟によって、帝国主義国は二極化した。世界大戦勃発の可能性をはらんだ情勢が生まれてしまったのである。

一方、オスマン帝国、ペルシア（イラン）、清など、帝国主義国の利権争奪の場となりつつも独立を保っていたアジア諸国は、植民地化を免れるために、欧米モデルの近代化を目指した改革・革命の道を歩む。青年トルコ革命、イラン立憲革命などはそうした動きに位置付けられる。清では、義和団戦争後の一連の改革を経て、辛亥革命が勃発し、長きにわたった中国の帝政に終止符が打たれることになった。

“探究”してみよう！

- イギリスのインド統治と、日本の朝鮮・台湾統治を比較してみよう。どこが似ていて、どこが違っているだろうか。
- 戦争が起きると、人びとはどのような反応を示しただろうか。戦争をしている国、戦場となった土地、直接関係ない国の国民など、それぞれの場合について調べてみよう。
- 孫文やファン・ボイ・チャウなど、アジアの政治家たちの日本観について、調べてみよう。

〈参考〉

- 今井昭夫『ファン・ボイ・チャウ』（山川出版社、2019年）
- 深町英夫 編訳『孫文革命文集』（岩波文庫、2011年）